

模擬患者参加型演習が高齢者や看護大学生に及ぼす効果

松本智美, 幸 史子, 井口悦子, 出口由美, 斉藤昌子, 野口静子

要旨

本研究の目的は、教育的資料として模擬患者参加型演習が高齢者及び看護大学生に及ぼす効果を明らかにすることである。基礎看護学実習前演習に参加した高齢者 23 名と看護大学生 148 名を対象とした。模擬患者へのアンケート調査や学生が記載したレスポンスカードから得られたデータを質的記述的に分析した。その結果、模擬患者は【看護大学生を育てたい】【学生の成長を見て感じるができる喜び】【学生との関わりによる活性化】【不安】【負担感】、学生は【自分の傾向や課題に気づく】【患者の視点に気づく】の категорияが抽出された。このことから、模擬患者参加型演習は、高齢者の【看護大学生を育てたい】という役割意識を刺激し、学生の成長を実感できる喜びや看護大学生との関わりにより活力を得ることで役割意識の継続につながっていたが、同時に【不安】【負担感】も認識していた。一方看護大学生は、学生同士では気づけなかったことに自ら気づくことができていた。

キーワード

模擬患者 (SP)、高齢者、基礎看護学演習

1. 諸言

看護系大学に入学した学生において、生活体験の乏しさ、コミュニケーションツールが多様化した社会背景の中、同世代の若者同様コミュニケーションスキルの低下が指摘されている(廣瀬, 2011)。そのような中、文部科学省(2011)は「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」において、看護実践に必要な能力を提示し、看護学教育において実践能力の重要性を示し、これまでの知識偏重教育ではなく、実践能力を高める教育も必要であると述べている。模擬患者参加型学習効果として、「リアリティのある体験をすることで、学生のやる気や本気を引き出すきっかけとなっていることや大学と臨地との橋渡しの役割を担っている(渡邊, 2016)ことが報告されている。また、模擬患者は、演習に参加することで「看護への理解の深まり」「日常生活に活用できる知識の獲得」「学生との交流による活性化」といった効果を実感していた(玉田ら, 2014)。一方で、看護大学 1・2 年次の学生の特徴として、生活の実体験の少なさや適切な話し言葉を使って積極的にコミュニケーションをとることができない(加悦ら,

2006)ことや病棟や患者をイメージできない(安ヶ平ら, 2010)ことが報告されているように、臨地実習において、知識の実践への応用だけでなく、患者や臨床指導看護師とのコミュニケーションも充分取れない場合が多くみられる。学生への学習効果は明らかにされているが、模擬患者側からの評価や参加することの意義について言及された報告はない。

そこで、当学部基礎看護学領域では、より効果的な臨地実習が行えるよう、2014 年度から、実習の事前準備として、A 市の 2 つの老人会のボランティアによる協力を得て、模擬患者による演習を行っている。

今回、模擬患者へのアンケート調査(無記名)や学生が記載したレスポンスカード(記名)から、模擬患者参加型演習への思いやその効果を検討した。その結果から今後の課題を明らかにできたので報告する。

2. 方法

1) 用語の定義

模擬患者 (Simulated patient : 以下 SP とする)

本研究では、A市の地区老人会に所属し、基礎看護学における演習や講義内容や模擬患者について事前に説明を受けた地域住民によるボランティア。特別な研修会やトレーニングは行っていない。

2) 研究方法

(1) 研究デザイン 質的記述的研究

(2) 研究対象

当大学の基礎看護学領域では、教員がA市の地区老人会に出向き、演習の報告会と同時に広報活動を実施している。その地区老人会に参加した者の中で、演習・講義に参加可能な60歳～90歳代のSP23名を対象とした。当大学看護学部看護学科1年次(71名)、2年次(77名)を対象とした。

(3) 調査期間

2018年5月および2018年11月

(4) 基礎看護学実習Ⅰ前演習(1年次:コミュニケーション技術)の実施方法

この演習は、様々なコミュニケーションスキルを用いて、模擬患者とのコミュニケーションが展開できることを目的としている。SPには、当日演習前のオリエンテーションにて、①学生は入学して2ヶ月であること、②30分程度学生と会話してほしいこと、③持病等について学生が質問した場合、支障のない範囲で応えてほしいことを依頼した。SPひとりに対し学生3～4名を配置した。学生は、グループに分かれ、コミュニケーションを実施した。終了後にグループ毎にSPによるフィードバックが行われた。

(5) 基礎看護学実習Ⅱ前演習(2年次:日常生活援助技術)の実施方法

この演習は、患者の状態に合わせた援助計画を立案し、実施した看護をリフレクションすることで実習に向けた課題を明らかにすることを目的としている。SPには、当日演習前のオリエ

ンテーションにて、①事例の紹介、②それ以外は、SP自身の持病等を訴えるなど自然な演技で良いことを伝えた。学生は、演習の事前準備として、グループ毎に事例の情報収集とアセスメントを行い、援助計画を立案した。

SPひとりに対し学生4～5名を配置した。援助方法については、演習当日にSPから新たな情報を得て援助計画を修正し実施した。学生は看護師役1名が実施し、他の学生は物品の準備や記録など役割を分担した。

(6) 調査の実施方法

演習終了後、SPにアンケート用紙を配布した。質問内容は、『模擬患者として演じることができたか』『気づいたことを学生に伝えることができたか』とし、「できた」～「できなかった」の3択とした。『疲労感』『充実感』『負担感』『次の参加希望』については、「ある」「ない」の2択とした。また自由に記載できる欄を設けた。学生に対しては、演習直後に全員にレスポンスカードを配布し、自由記載とした。

(7) 分析方法

アンケート調査については、各項目の回答分布を割合で記述した。自由記載やレスポンスカードの内容については、類似した文脈をまとめカテゴリー化し、質的帰納的に分析を行った。研究グループの教員数名で結果の信頼性、妥当性の検討を行った。

(8) 倫理的配慮

SP及び学生には、文書にてアンケートまたはレスポンスカード使用の是非、研究参加の拒否の保証、研究不参加による不利益が生じないこと、個人情報の保護、研究結果の公表について説明し同意を得た。この研究は、活水女子大学倫理委員会の承認を得た。

3. 結果

1) 模擬患者の概要

SPの年齢幅は、男性70歳～90歳、女性69歳～88歳で、参加者数は男性14名、女性5

～9名であった。(表1)

表1. 模擬患者の概要

演習内容	参加者人数(人)			平均年齢(歳)	
	男性	女性	計	男性	女性
コミュニケーション技術	14	9	23	78.8	76.6
日常生活援助技術 (バイタルサイン測定・足浴)	14	5	19	79.1	76.2

2) アンケートの調査結果：コミュニケーション技術(1年次)

『SPとして演技ができたか』については、「できた」「まあまあできた」と回答した人は87.0%であった。また、『気づきを学生に伝えられたか』については、「できた」「まあまあできた」と回答した人が78.2%であった。演習後の『疲労感』『負担感』は「ない」と回答した人が91.4%、『充実感』が「ある」、『次回も参加したい』と回答した人は95.7%であった。(図1)

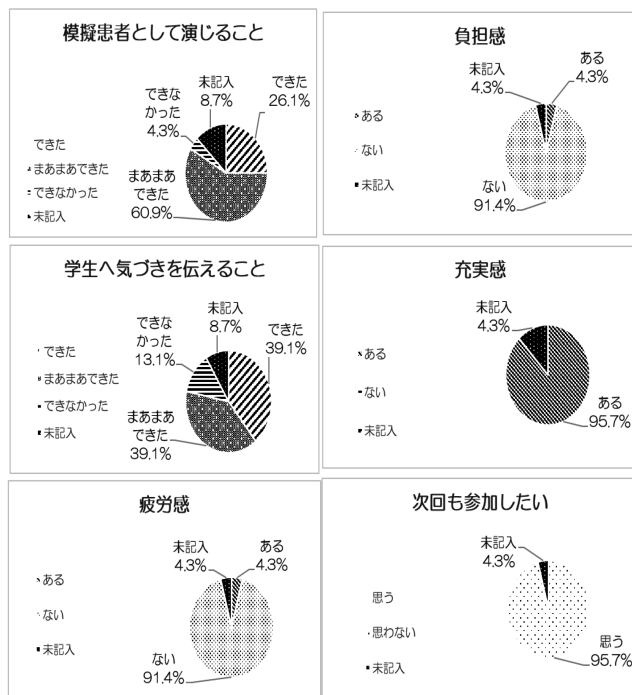


図1. アンケートの調査結果：コミュニケーション技術(1年次)

3) アンケートの調査結果：日常生活援助技術(2年次)

『SPとして演技ができたか』については、「できた」「まあまあできた」と回答した人は100%、『学生へ気づきを伝えられたか』については、「できた」「まあまあできた」と回答した人が94.8%であった。演習後の『疲労感』『負担感』は「ない」と回答した人が94.7%、『充実感』が「ある」、『次回も参加したい』と回答した人は95.7%であった。(図2)

100%であった。(図2)

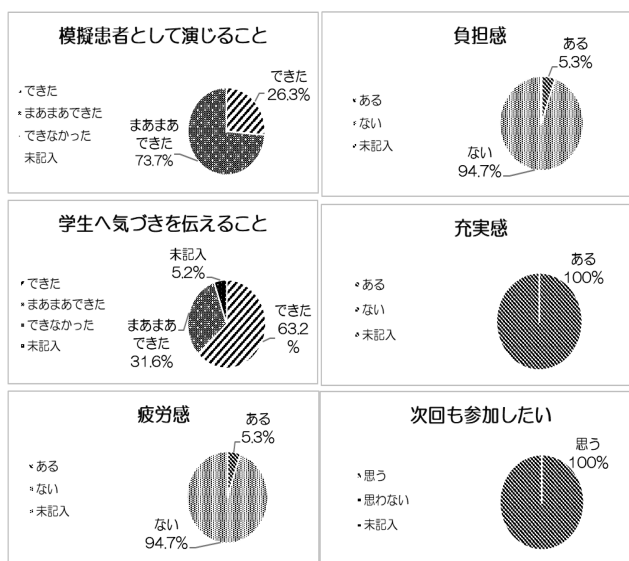


図2. アンケートの調査結果：日常生活援助技術(2年次)

4) 高齢者に及ぼす効果とその思い<カテゴリー：【】、サブカテゴリー《》、自由記載内容：「」で示す>

「学生さんも初めてだからでしょうか、やはり堅い感じのようでしたので少しでも和まれるように感じ取り自分が学生さんの質問に少し長く話しすぎたと感じています」など、《学生の学びに貢献したい思い》や、「血圧測定の時、腕巻きをもう少し練習して欲しかった」など、《看護師を育てることに貢献したい思い》をもっていた。「昨年、演習に参加しましたが、1年たった成長のあとがよくわかりました」と《学生の成長を実感》し、「学生の真面目な言動に大きな期待がもてた」「時間はかかったが、まじめさにここ打たれました」など《学生の学ぶ姿勢に好感》や《学生の学ぶ姿勢に感動》し、「ひとつひとつ丁寧に声掛けがあり安心して体験させていただきました」と《援助技術に対する肯定的な評価》をしていた。「昨年1年間休みましたが、久しぶりにきて若い人と会話をして元気をいただきました」など学生との関わりを通してSP自身も活力を得ており、《学生とのかかわりによる活性化》がみられた。一方で、「ベッドから起き上がる時に腰痛・膝痛が発生するしきみを自分なりに解説したがどうだっただろうか」など《役割遂行に対する自身の不安》や「日常生活であまり緊張すること」がなく、《人前で発言す

ることに対する負担感》も抱いていた。これら 9 つのサブカテゴリーから【看護大学生を育てたい】【学生の成長を見て感じる事ができる喜

び】【学生との関わりによる活性化】【不安】【負担感】の 4 つのカテゴリーが抽出された。(表 2)

表 2. 高齢者に及ぼす効果とその思い

カテゴリー	サブカテゴリー	コード (代表例)
看護大学生を育てたい	学生の学びに貢献したい思い	学生さんも初めてだからでしょうか、やはり堅い感じのようでしたので、少しでも和まれるように感じ取り自分が学生さんの質問に少し長く話しすぎたと感じています。
		声がやや小さく聞き返す場面がありましたので、患者の様子を観察し、もう少し大きな声で話すように努力されてください。
		初めての体験だったので、気づきを十分伝えることができなかった。次回はよく観察して伝えたい。
	看護師を育てることに貢献したい思い	<p>血圧測定の時、腕巻きをもう少し練習して欲しかった。</p> <p>血圧測定に時間がかかった。声が小さかったようです。次回参加できたら勉強して質問してみたい。</p>
学生の成長を見て感じる事ができる喜び	学生の成長を実感	<p>昨年、演習に参加しましたが、1 年たった成長のあとがよくわかりました。</p> <p>学生は 1 年間でとても成長していました。</p>
	学生の学ぶ姿勢に好感を抱く	学生の真面目な言動に大きな期待がもてた。
		時間はかかったが、まじめさにこころ打たれました。
		頑張って勉強されている姿がみられました。
	学生の学ぶ姿勢に感動	私（模擬患者）のことを知りたいと各々質問事項を決め、短い時間を有効に使うということが伝わってきました。
		<p>目標と志をもって勉強されていることに感動しました。</p> <p>学生の真剣な態度に感心しました。</p>
	援助技術に対する肯定的な評価	<p>やさしく穏やかな対応ぶりで好感がもてた。</p> <p>ひとつひとつ丁寧に声かけがあり安心して体験させていただきました。</p>
学生との関わりによる活性化	学生との関わりによる活性化	時間の許す限り参加させていただきます。
		昨年 1 年間休みましたが、久しぶりにきて若い人と会話をして元気をいただきました。また楽しみに来たいと思いました。
		若い学生さんと話ができて、学校に来て大変良かった。
不安	役割遂行に対する自身の不安	<p>振り返りの時間をもう少し欲しいと思います。模擬患者役ができたか少々不安です。</p> <p>ベッドから起き上がる時に腰痛、膝痛が発生するしくみを自分なりに解説したがどうだっただろうか。</p>
負担感	人前で発言することに対する負担感	日常生活であまり緊張することが無かったので、人前で意見を言うことに負担を感じました。

- 5) 看護大学生に及ぼす効果<カテゴリー：【1】、レスポンスカードの内容：「」で示す>
「声の大きさや話すスピードなど、学生同士では気づかないことを気づくことができた」「自分の計画を実施するのに精一杯で、患者さんの状況や思いまで気持ちが向いていなかった」など、学生同士の演習では得られないことを実感し【自分の傾向や課題に気づく】ことができていた。また、「実施前の細かな声かけが大事だとわ

かった」など、実践に近い状況での演習により、これまで気づけなかった【患者の視点に気づく】ことができていた。(表 3)

4. 考察

SP の年齢は、60 歳代から 90 歳代と幅広く、全員が、過去 5 年間ほぼ毎年模擬患者としての活動に参加していた。性別では、女性よりも男性の参加者人数が多かった。青木 (2014) は、

表 3. 看護大学生に及ぼす効果

カテゴリー	内容
自分の傾向や課題に気づく	声の大きさや話すスピードなど、学生同士では 気づかないことを気づくことができた。(1 年次)
	自分のコミュニケーション上の改善点がわかった。(1 年次)
	何を話そうかという思いで精一杯で、患者さんの話す内容を聞くことができなかった。(1 年次)
	一つの話題について掘り下げた質問ができるように改善したい。(1 年次)
	自分の計画を実施するのに精一杯で、患者さんの状況や思いまで気持ちが向いていなかった。(2 年次)
	自分の計画を実施することばかりに集中してしまい、何のために実施するのか、その目的を説明したり、測定した血圧の値を伝えることができなかった。(2 年次)
	演習場面では、次に動作の声掛けがうまく伝えられていなかったのも改善したい。(2 年次)
	もっと自分の知識を増やすことが必要だと感じた。(2 年次)
患者の視点に気づく	自分では大きくゆっくり話しているつもりでも患者さんによっては聞こえにくい人もいるとわかった。(1 年次)
	どの SP も笑顔や聞く態度のことを話されていたので、ノンバーバルコミュニケーションはとても大切なことだとわかった。(1 年次)
	もっと自分のことを話して知ってもらおうと、相手も話しやすくなるのではないかと感じた。(1 年次)
	実施前の細かな声かけが大事だとわかった。(2 年次)
	足浴の際に、学生が手でお湯の温度を確かめていないのに、急にお湯をかけられると怖いということを教えてもらった。温度は適切であるという様子を見せたり、伝えるべきだった。(2 年次)
	患者さんは病気で不安なことが多いので、伝えなければならないことは、はっきりと分かりやすく明確にして伝えるべきだと思った。(2 年次)

在宅高齢者の研究において「男性は女性に比べて社会的役割が多く、役割を担うことや遂行することが社会的存在感を保持させ自己効力感や充実感などを高めることになり、精神的健康を高める」と述べている。演習参加は、高齢者にとって社会の中で役割を担う場でもあり、社会的存在を自身が意識できる場でもあると考えられる。

アンケート調査の自由記載からは、演習に参加することで、高齢者の【看護大学生を育てたい】という役割意識を刺激し、更によりよい役割を演じたいといった内発的動機付けになっていた。また【学生の成長を見て感じとることができる喜び】を実感したり、【学生との関わりによる活性化】を得ており、そのことが役割意識の継続につながっていた。学生の演習に SP として参加することで、今までとは違う自分の役割を認識し意欲を向上させるきっかけとなったことや、自己の健康に着目したり、自己の生活を振り返るきっかけとなっていること(阿部ら, 2012) が報告されている。本研究の SP は、自身の健康に着目するといった内容はなかったが、役割意識を向上させていることでは一致していた。一方で、模擬患者養成講座を修了しており 3~4 年の経験のある SP を対象とした研究では、本当に自身の演技やフィードバック内容でよいのか、SP として学生の役に立っているのかの自問をもっており、「役割遂行に対する不安」がみられている(山崎ら, 2016)。本研究の SP は、トレーニングを受けていない SP であったが、同様の結果が得られた。【不安】に対しては、SP 自身が達成感を抱けるように、学生の反応をもっとフィードバックすることが教員に求められているのではないかと考える。またトレーニングをしないことで自然に患者役を演じることができるメリットもあれば、人前で発言することに【負担感】を抱く SP もいることから、SP に対してのトレーニングについては、今後の検討課題としたい。

学生のレスポンスカード内容の結果は、1・2 年次共にカテゴリーは共通していた。SP との演習をとり入れることにより、模擬患者から気づきを伝えてもらうことで、ケアの提供の仕方

やコミュニケーションのとり方などに学生自身が気づくことができ、実習に向けて改善の努力を行うチャンスとなっていた。渡邊ら(2016)の研究でも、看護大学の教員が認知する SP 患者参加型教育の教育効果として、「臨地でのリアリティに近い」「患者をイメージしやすい」「自己課題の明確化」「学習の内発的動機づけ」「コミュニケーション能力の形成」「看護職としての態度の形成」が報告されている。本研究では、「看護職としての態度の形成」「コミュニケーション能力の形成」までは見られていないものの、「自己課題の明確化」「学習の内発的動機づけ」については、同様の効果がみられた。

今回は演習直後の効果を調査したものであり、基礎看護学実習に対する演習の効果は調査していない為、今後の課題としたい。

5. 結論

SP 参加型演習により、SP は、【看護大学生を育てたい】【学生の成長を見て感じるができる喜び】【学生との関わりによる活性化】【不安】【負担感】を感じていた。一方学生は、学生同士の演習では得られないことや、これまで気づかなかった【自分の傾向や課題に気づく】【患者の視点に気づく】ことができていた。

6. 利益相反

本調査・報告において利益相反はない。

謝辞

今回、アンケート調査に協力頂いた A 市の地区老人会の皆様に心より感謝いたします。

引用文献

青木邦夫(2014)、在宅高齢者の精神的健康状態と社会関係、生きがい感、役割および身体的健康状態ほかの関連性、老年精神医学雑誌、25、916-927
阿部オリエ、小手川良江、本田多美枝、他(2012)、看護学実習前演習に地域住民が模擬患者(simulated patient : SP)として参加することの意義に関する研究、日本赤十字九州国際看護

大学紀要、11、49-58

加悦美恵、飯野矢住代、河合千恵子、(2006)、基礎看護学における SP 参加型の授業と臨地実習の連繫 学生の臨地実習の体験のふりかえりから、日本看護科学会誌、26 (2)、67-75

玉田雅美、澁谷 幸、池田清子、他 (2014)、地域住民ボランティアが参加する看護技術演習の意義 - 地域住民の思いと効果 - 、神戸市看護大学紀要、18、29-38

安ヶ平伸枝、菱沼典子、大久保暢子、他 (2010)、基礎看護学担当教員の捉える学生の特徴と教授学習方法の工夫、聖路加看護学会誌、14 (2)、46-53

山崎 歩、中村もとゑ、鈴木香苗、他 (2016)、看護系大学で活動する模擬患者ボランティアが抱える課題、日本赤十字広島看護大学、16、39-46

渡邊聡美、山崎 歩、中村もとゑ、他 (2016)、看護基礎教育における模擬患者参加型教育の教育効果と課題、日本赤十字広島看護大学、16、21-28